

(2) - 3) ③干潟の生きものによる環境教育と地域生業文化の再生（大分県中津干潟）

大分県中津干潟では港湾開発を機に干潟の生物多様性があらためて見直され、干潟を利用した環境教育活動や漁業者と連携した体験などの利活用が展開している。市民と行政が一体となった取組の結果、干潟保全と両立する港湾開発が試みられている。

a. 取組の背景と経緯

中津干潟は、付近の河川から栄養分が供給され、各種のカニ、貝類、ゴカイなどの底生生物やプランクトン、魚類、水生植物が数多く生息している。また、東南アジアやシベリア方面を行き来する渡り鳥の重要な中継地点となっている。様々な生きものの産卵場ともなっており「いのちのゆりかご」とも言える。

しかし、高度経済成長期以降、市民と海との距離は遠のいてしまい、浜辺にはゴミが捨てられ、汚くて危ない場所と言われるようになっていた。1999年中津港が重要港湾に指定されたのを受けて、あらためて中津干潟の自然環境の豊かさに目が向けられたのを機に、市民団体水辺に遊ぶ会が設立。調査の結果多様な生きものの生息が確認された。こうした干潟を守りたい、とカブトガニをはじめ干潟特有の生きものをテーマにした保全活動が開始された。

b. 活用方法

干潟環境を利用した環境教育活動を軸に漁業や地域文化の再生など地域づくりへの幅広い活用がなされている。

■観察会と情報発信

定期的に干潟観察会を開催し干潟での体験プログラムを提供している。干潟での生きもの調査や漂着ゴミ調査など各種調査の成果は同会によって情報発信されており、小中学校や高校での環境学習に活用されている。

■漁師との交流・体験や地域文化の再生

地元の漁業者と連携して、中津川干潟で古くからおこなわれていたタコつぼ漁や、海苔漉き体験、囲い刺し網漁など、干潟漁業の体験活動が実施されている。

また、枝のついたマダケを使う伝統漁法「ササヒビ」が40年ぶりに再現され、市民が竹の切り出し、漁業者が海への建て込み、行政が中心となって漁業者や市民と効果のモニタリングを行うなど、産官民が一体となった取組も始まっている（※ササヒビはH24の九州北部豪雨で被害を受け撤去したため、現在は実施していない）。



写真：子どもたちのタコつぼ漁体験（「いきものにぎわいづくり」（国交省 2012 年）より）

c. 保全活動と野生生物への効果

取組の中で「海辺の環境学習の手引き」が作成され、県全域における里海活動の促進に寄与している。また、生物多様性への関心が高まり 2009 年からは河川、湖沼及び海域の水生生物による水質環境基準の設定が行われている。

また、重要港湾中津港湾区域における高潮対策の護岸についても、海岸線から約120m後退して設置されることとなり、河口干潟と湿地の環境保全に有効なセットバック護岸が実現した。



写真：中津干潟のセットバック護岸（「いきものにぎわいづくり」（国交省 2012 年）より）